

苦小牧市医師会

医師

長尾 真幸

虚血性大腸炎

最近、虚血性大腸炎という下痢、腹痛を伴い突然、真っ赤な下血を見る病気が増えています。

この疾患は、名前のとおり腸管壁の血流が低下するために、組織が障害されて発症する病気です。腸はもともと血流が豊富ですので、血流の低下（血管側要因）だけでは組織の障害は起こらず、その上に便秘など腸管

高血圧や便秘傾向の人に発症

内の圧の上昇（腸管側要因）が同時に加わった時に起こるものと考えられています。

したがって、動脈硬化の進んでくる高齢者（六十―七十歳代に最も多く発症します）、心不全や糖尿病、高血圧といった病気を持った人、あるいは腹部手術の既往のある人で腸管の癒着などがあって腸の運動がスムーズでなかったり、便秘傾向のある

人に多く発症します。もちろん、これらの要因をいくつも持っている人ではより危険性が增大します。人口の高齢化や成人病の増加などに伴い、この病気も増えてきている訳です。

しかしこのような基礎疾患の無い若い人にも、強いストレスが加わった時などに発症することがあります。

病型は程度により①二―三週

間で跡も残さず治癒する一過性型②狭窄など腸管の変形を残す狭窄型③完全に血流が途絶される壊死型―の三型に分類されます。多くは一過性型で、すぐに出血もおさまりますが、大腸がんや他の出血を起こす腸炎との鑑別が必要になりますので、直ちに大腸内視鏡検査を受ける必要があります。

治療は、程度の強い狭窄型と

壊死型では手術が必要となりますが、それ以外は入院のうえ絶食と点滴を行い、腸の安静をはかることにより軽快し、再発することもまれです。

予防としては、高血圧や糖尿病などの病気があれば適切な治療を受けておくことと、便秘気味の人は、ふだんから便通を整えておくことが必要です。

お問合せは、苦小牧市医師会

電話 33-4720へ